

牧畜民社会における家畜市場に関する研究

平成 22 年入学
タイフィールドスクール
調査地：ケニア共和国
楠 和樹

キーワード：社会変化、市場経済、ラクダ、商品、ソマリ

自分の研究テーマについて

アフリカ東部や南部の牧畜民社会について、彼らの飼養するウシやラクダなどの家畜が特別に価値づけられた所有物であることがこれまで多くの研究者によって指摘されてきた。なかでも、市場経済や貨幣使用の浸透、学校教育の普及などに対して彼らがいかに対応しているかという、ひろく近代化と社会変化に着目した研究は、開発実務とのかかわりも深い分野である。市場経済の浸透を対象とする研究では、国民国家の領域内でも周縁部に暮らす牧畜民の居住域に設置された家畜市場を、人々が既存の生業様式や社会関係を活用しながらどのように利用しているのか、という問題がたてられる。

ソマリの人々が多く居住するケニア共和国ラガデラ県の行政の中心地モドガシ市は、2007 年にラクダをおもな商品とする家畜市場が設置されて以降、地域内のラクダ流通の中継点のひとつとして機能している。

そこで本研究では、家畜市場での取引の直接観察と売り手や買い手などの市場関係者からの聞き取りによって、市場においてラクダが取引される過程を解明することを目的とした。これまでの調査では、この市場の取引においてはラクダの売り手と買い手のあいだをとりもつ仲介人 (*dilaal*) が独自の役割を果たしていることをあきらかにした。

フィールドスクールで得られた知見

今回のフィールドスクールでは、タイで長年活動されている支援団体の活動地を中心に見て回った。このうち、とくにわたしには、みずから農業を営みながら「ファーン川流域有機農業ネットワーク」という団体に活動されている方からうかがったお話が印象深かった。

彼の説明によると、大企業の資本投下により当地で近年急速に規模を拡大しつつあるミカン栽培は、畑地開拓による森林破壊やファーン川下流域での水不足問題などの環境・資源問題を引き起こしている。また、ミカン農園の労働者のほとんどは隣国からの移民であり、その劣悪な労働環境のゆえに大多数が 1 年以内に帰国してしまうとのことである。そこで、この団体では当地の農業生産者に対して有機農業を推進するだけでなく、そうして生産された作物の消費者のグループを組織し、そのグループとの協議によって価格を設定する市場を開設している。また、年に一度消費者向けに生産地を紹介するツアーを組織しているとのことである。

このように、「ファーン川流域有機農業ネットワーク」は作物をみずからの手で作るだけでなく、作物が作られてから消費者の手に渡るまでの全過程を視野にいれた活動を展開している。現地の

人が自分の住む地域環境における問題を真剣にとらえ、みずから農業を営むかたわらで、人と商品作物との関係、売り手と買い手との関係を模索する活動をつづけているその姿に、つよい印象を受けた。

フィールドスクールで学んだことをどのように研究テーマにいかせるか？

今回のフィールドスクールでは、商品市場における売り手と買い手のあいだの関係について考える糸口をえたように思う。

わたしが調査したモドガシの市場においては、仲介人 (*dilaal*) と呼ばれる人々が家畜取引において特徴的な役割を果たしている。仲介人は売り手に代わってラクダ商品を希望する価格で買ってくれる買い手を探すことを仕事にしている。逆に買い手の代わりに売り手と交渉し、買い手の希望する属性のラクダを手に入れることもある。一般的に売り手は、価格や取引に関する種々の知識において買い手よりも劣り、取引のやり方に精通していない。仲介人はこうした売り手を支援し、適正な価格で取引を成立させる役割を果たしているように思われる。



【写真1】 ラクダ市場の様子



【写真2】 水飲みの番を待つラクダ



【写真3】 ラクダ肉を使った料理